武蔵野日曜集会

神の義
ロマ書第1章17節、3章21節他

１９８９年11月５日（武蔵野）
小池辰雄

信仰とは内的霊的な行為　キリストに圧倒されて生きている　相互内在、相互内住　エホバの義は即ち救　天的必然が本当の自由　パウロは決定的に聖霊に撃たれた　十字架ですっ飛んでいるところに聖霊はやってくる　キリストの信義愛に生きる　隠れた福音

【ロマ1】

17神の義はその福音のうちに顕われ、信仰より出でて信仰に入らしむ。録して「義人は信仰に因って生く」とあるが如し。（私訳）

【ロマ3】

21然るに今や律法の外に神の義は顕われたり。これ律法と預言者とに由りて証（あかし）せられ、22イエス・キリストを信受するに由りて信ずる者の中に臨みたる神の義なり。これには何らの差別なし。23凡ての人罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、無償にて神の恩恵（カリス）により、キリスト・イエスに在る贖罪によりて義とせらるるなり。（私訳）

●信仰とは内的霊的な行為

これは、著作集第十巻『聖書は大ドラマである』の「11月17日　神の義の顕現」、「11月18日　恵信の義」の項の私の訳です。短いけれども、私は解説を書いて、もうちゃんと話すことは全部ここに言ってあるなぁと、今朝方も読んで、むしろ驚いたわけです。

「信仰によって義とされる」

という言葉は、プロテスタントでしょっちゅう聞く言葉です。この「信仰義認」という神学的な表現のもとは、ご承知のとおり、

「アブラハム、神を信ず。神これを義となしたまえり」

という、創世記15章の記事です。第十巻の「1月10日　信義一相」の項を読みます。

「アブラムは実存主（エホバ）を信じた、神（かれ）はこれを彼（かれ）の義となし給うた。」（創世記15・6）

アブラムがハランを立ち出でたときは既に七十五歳であったが、今や八十歳を越えているのに妻サライとの間に嗣子（よつぎ）が出来ないので悩んでいた。すると或る夜、神がアブラムを幕屋の外に呼び出して、「さあ天を仰いで星を数えて見よ、あれが数えられる

かね。」神は彼に言った、「汝の裔もこう成るよ」と。「彼はエホバに信じ入った。そこで神はこれを彼に対して義とみなした」(直訳)。

信仰とはこのアブラムのように、自分の経験的判断や常識を乗り越え、神意、神言を全存在を以て信受することである。おのれを否とし、神を然りとする、即ち－と＋だからそこに霊的放電、火花が散るような関係である。

信仰とは神の言または行に圧倒されて、全存在を以て神の中に信入する内的霊的行為である。

内的な霊的な行為が信ですよ。こんな表現は、私は無教会にいる時に、一度もどなたからも聞きませんでした。これは私の賜った表現です。内的霊的な行為が信仰である。信仰と行為をしょっちゅう分けていますね。ところが、信仰それ自身が内的な霊的な行為であると、私はそう言わざるを得ない。

だから信仰とは仰ぐのではなく

始めは、「仰ぐ」でいいですよ。内村先生は、「キリストの十字架を仰ぎみる」というような言い方をしょっちゅう言っていた。

行くのである、信行である。

神・キリストの所に行く。「行く」という言葉は、別に言うと、「帰る」ことになる。神さまのもとに、キリストのところに帰入する、帰り入る。このことは、具体的には我々には何かというと、祈り入る、祈入することです。帰入と祈入は同じことです。入らなければ、絶対に力はこないから。外から頭で信じたって、そんなことでは力はこない。それが普通の信仰だからね、「信ぜよ、信ぜよ」と一生懸命に無理している。そのまま入っていけばいい。こっちを整える必要はなにもない。入ると、今度は交わる世界だ。信交です。

するとその状態は神の中で信交的一如の相となる。かかる信を神は義とし給う。信義一相である。一般に「信仰によって義とされる」信仰義認という神学的表現が観念化しているので私は敢えてここに新宗教改革の原点があると申したい。本当の信仰とは

神・キリストの神行に

今度は、神行だ。「信仰は神の業である」とマルティン・ルッターも言った。

圧倒されて信入する信即行、信行一相で、そこにはキリストのみ霊の力が必然臨むのでそこから外的行為がおのづから発するというものである。」

と。おのずからです。そういう、寸分ズレのないこと。それでも人間はズレるんだよな、しょうがないもんだ。そのズレのない人に入っていかないと、力が来ない。

そういうように、常識的には子供が生まれそうにないような年齢になっても、

「お前の子孫は空の星の如く、浜の砂の如くなる」

と言われた。

「はい」

と言って、自分の判断を全部超越して、否として、神さまの御言を受けとった。全身で受けとる。頭ではない。単なる心でもない、感情でもない。全身で受けとる。全身で受けとるから、私は「行為」だと言うんです。全存在的なもの。だから、それを体受という。体で受けとる。日蓮が、

「身読せよ。法華経を身で読め」

と言ったでしょ。さすがは、日蓮ですね。

「頭でもない、心でもない、身だよ」

と言った。超一流の人たちは、表現は違っても、みんな同じ次元にいるから、一流の坊さんのものは読むと楽しい。超一流のこちらの僧侶たちは仏の世界で、キリストの直弟子と同じような次元にいるからね。

●キリストに圧倒されて生きている

その約束されたイサクを、今度は「献げろ」と、ひどいことを言ったものだ。あれは人身御供です。決して誉めた話ではないんだ。それでもアブラハムは黙って――彼は「はい」とも言わない――黙って出かけた。あそこが面白いところです。あそこに「はい」とも書いてない。また、「なぜですか?」なんて聞きもしない。さっそくアブラハムは、ロバに薪を背負わせて、イサクを連れてホレブの山へ出かけて行った(創世記22章)。私は画家だったら、あの所を描きたいね。これが正に、

「アブラハムは信仰によって義とされた」

という事態です。パウロはそう言ったが、ヤコブは

「アブラハムは行為によって義とされた」

と言った。どっちも分析してはいけない。

「信にして行なり、行にして信なり」

という世界です。パウロとヤコブの表現は違っても、実は同じことなんです。黙って出かけて行った。これが信仰の姿です。じっとしていても、全身で受けとる。それから、直ちに動いても、全身的です。全部それは、信仰の事態はそういう意味において静動一如なんです。あるときは静のかたちで、あるときは動のかたちで受けとる。その時その時でどっちでも結構です。じっとしてても上からもの凄い力がくる。これはもうしょうがない。だから、

「私はキリストに圧倒されて生きているんですよ」

と言う。瓢々としたもんだな。信仰のもともとは、

「それでよろしい。その姿だ」

というのがこの義なんです。神さまの意志と、神さまの力が働く。神さまの意志は必ず力を伴っていますよ。キリストは神に従って、それから一生懸命で力を現すなんていう、そ

んなんじゃない。御言を聞けば直ちに力がはたらく。

「**わが言は霊なり生命なり力なり**」

というのがキリストの御言だから。

「**ラザロよ、起き出でよ**」

と言えば、もう腐りかかっている四日目の死人が甦ってきた。

今度、そのことを「エン・クリスト」誌40号に「使徒ヨハネの本質」という題で書いたでしょ。とにかく、私の書いたものをじっくりお読みくださいよ。私は決して一行として無駄は書いてないはずですから。私は、いわゆる説明的なことは嫌いなんだ。そんな説明なんかしたって、人の魂は動きはしない。言わざるを得ず、書かざるを得ずして書いている。

「よし！」

ということ。ただ「よし」だけではない。義とされて、ただ「義(よろ)しい」と言われたくらいでは、しょうがない。その義を本当に体現した人はイエス・キリストのほかにいない。全存在で現じて動いていたひと、地上において天国を現じていたひと。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書におけるキリストは全部、天国的現実ですよ。福音書はなぜ、喜びのおとずれかというと、キリストが天国を現じて歩いていたのが、この福音書だから。福音書だけ破りとって、ポケットに入れてしょっちゅう読んでくださいよ、それくらいのことをしないとね。

●相互内在、相互内住

体現すること。だから、

「**我を見し者は父を見しなり**」

とキリストは仰った。他に誰も言えない。私たちは、ある瞬間には、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えますけれども、しょっちゅうそういうわけではない。だけれども、

「我を見よ」

と、パウロもペテロもある瞬間にはハッキリ言った。というのは、彼等は本当にそこにかなり常住的に居たからね。かなりだよ、しょっちゅうとは言わない。このしょっちゅうの方はキリストだけです。だから、パウロは、

「**義人なし、一人だになし。イエス・キリストだけが義人だ**」

と言う。キリストは義の人だと。神の義を体現した人。だから、キリストを本当に身受すれば、義を賜(たまわ)る。「義とされる」のではなくて、義を賜る。キリストの義の力を、神意にこれ従うところのその力を賜る。その力のもとは何かというと、聖霊であります。だから、聖霊を賜ると同時にそれは、義を賜っているし、愛を賜っているわけです。そういう具体的な世界です。「義を賜る」なんていう言い方は、普通の神学ではしない。「義とされる」と

いうことばっかり言っている。文字の上では、「義とされる」という字ですよ、「ジャスティファイ」という字ですから。

本当の義人というのはキリストだけです。そして、それを賜る。だから、キリストを生きる。生きる現実は「エン・クリスト」（キリストの中）に在ること。キリストが「エン・エモイ」（わが中）に在りたもうこと。これが相互内在、相互内住です。それが信仰の神秘なんです。絶対に神秘の世界です。観念信仰はこの神秘の現実を知らない。それをむしろ除けてしまう。「神秘」という言葉は、無教会では嫌いで使わないんだ、「神秘というのは危ない」なんて言って。

ヨハネ伝6章なんかはもの凄い神秘の世界だ。

「我を食らえ、我を飲め」

なんていう。そうすると、「聖餐」でもって葡萄酒を飲んだり、パンをかじったりしているけれども、それは一つの形さ。葡萄酒を飲み、パンをかじっている時に、キリストを本当にくらっていれば、本当はぶっ倒れるくらいの世界なんだ。あれは、かじって飲んで、それでいいとしているんだな、いわゆる聖餐を受けてる人たちは。

そうすると、「そんなのは形だから」と言って、内村鑑三は聖餐も洗礼もやらない。「ただ信仰のみ」と言う。「信仰のみ」なら、本当にパウロのような「信仰のみ」になっているかというと、「十字架、十字架」と言うばかりで、聖霊まできていない。そこに無教会の限界がある。内村先生はもちろん、ただそれだけとは言いませんよ、時々火花を散らせている方ですけれども。それであとは、聖書の「研究、研究」という。私は、

「研究で聖書の世界に入れるか。降参しろ。福音書の現実に降参して、『参りました！』と言って、ぶっ倒れろ。そうしたら、キリストが起こしてくださる」

と言う。そういう世界だからね、もうありがたくてしょうがない。楽でしょうがない。何も力まなくていいんだから。

「頑張れ」なんて、私はひとつもがんばらない。頑張る必要ないから。何か言うと、何でも世の中では、「頑張れ、頑張れ」と言っている。あれは仕方がないから、力んでいる。圧倒されるんです、頑張るんじゃない。キリストに圧倒される。これは完全に受け身なんです、受動なんです。だから、我々の行動は全部、リアクションです。反射的行動なんです、上からの力で。光がくれば、鏡から光は反射するんだよ、あれと同じことです。

●エホバの義は即ち救

では、ローマ書に入ります。1章17節、

17 **神の義はその福音のうちに顕われ、**

この言葉にマルティン・ルッターが始めは躓いた。「義が福音のうちに顕れた」とは一体なんだと。そのことは実はイザヤ書に出ている。

「エホバ義をまといて護胸とし、救をその頭にいただきて兜となし、仇をま

といて衣となし、熱心をきて外服(うわぎ)となしたまえり。」（イザヤ59・17）

これは非常に詩的な表現をしてますが、神さまの義と救が同義語に使ってある。義が同時に救うということが、こういう表現でも分かる。

「**わが義はちかづきわが救はすでに出(いで)たり。わが臂(かいな)はもろもろの民をさばかん。**

……なんじら目をあげて天を観(み)また下なる地をみよ、天は烟(けむり)のごとくきえ地は衣のごとくふるび、その中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救はとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし。……そはかれら衣のごとく蠹(しみ)にはまれ、羊の毛のごとく蟲(むし)にはまれん。されどわが義はとこしえに存(なが)らえ、わがすくい万代(よろずよ)におよぶべし。」（イザヤ51・5…8）

これは素晴らしい言葉ですね。これも、救いと義が一つになっている。もう、第二イザヤ、第三イザヤになると、

「**エホバの義は即ち救いだ、審くのではないぞ**」

ということになる。しかし、イスラエルの民は信仰からずれてしまったものだから、審かれてしまった。北イスラエルも、南ユダも滅びた。これは預言者たちが

「**お前たちはだめだ。神に帰れ、帰れ、帰入せよ**」

と言った。ところが、アッシリヤとバビロニアが神さまの手先になって、これに滅ぼされてしまった。義だとか、救いだとか、恵みだとか、愛だとか、こういう上からのものを拒んでいるんだよな。

お父さんやお母さんが子供を本当に信じ愛しているのに、それから背くのと同じことだ。本当の関係というのは、親子関係でも、先生と生徒の関係でも、兄弟の関係でも、社長と社員の関係でも、全部、これは信愛関係です。むしろ、愛信関係と言った方がいい。上の者が下の者を愛する。愛とは助けてやることです。信とは信頼することです。決して、権利義務の関係ではない。組合なんて本当は要らないんだよ。組合の要らない会社もたまにありますけれども。社員は一生懸命でやっていれば、社長さんは「よし、よし」と言って、大いに恵んでくれるんだよな。また片一方では、いばって社員を奴隷のように使うから、「けしからん」と言って、ストライキを始めるんだ。それは結局、信愛関係がないから。そういうように抑えられるものだから、自由が欲しくなる。

●天的必然が本当の自由

ガラテヤ書でも自由の問題があります。

「**御霊のあるところに自由あり**」

という。自由は自主です。その反対は僕、奴隷だ。主と僕。親と子。この二つの関係が大事なことです。キリストは、神さまの御意にこれ従って、

「**あなたの御意がなるように**」

と言って、自分の気持ちを棄てていた。それは僕の姿です。だから、第二イザヤ書に「エホバの僕の歌」という素晴らしいのがある。特に、あの53章がそうです。「エホバの僕」という。この僕は、卑屈になって仕方がないから従うのではないですよ、従うことが楽しいんです。相手が絶対者だから、その絶対者の意志を全身で受けとると、実はこの僕の、全身で受けとっている世界が自由なんです。絶対的な境地なんだから。僕であることが自由なんだ。そういうことは普通の人には分からないです、「何が自由か」と。上が何もなくて、自分勝手が自由と思う。ところが、自分勝手の自由は自分の欲の僕となっている。捕らわれている。欲の僕になっている。それはまた、サタンの僕になっている。いわゆる自由は、自分勝手の自由は、欲がからまって、サタンの僕になっている。

ところが、キリスト・神さまに従っているこの光の世界の僕は、これが本当の自由である。全く逆なんです。そのことをマルティン・ルッターが『クリスチャンの自由』で言っているわけです。あの本は是非――岩波文庫にも訳があるから――一遍読んでごらんなさい。ドイツ語の出来る人はドイツ語で。私は詳しい教科書を作ったから、欲しければ上げるよ。

親子の関係。キリストは神さまのことを「父よ」と言った。これは親子の関係です。これは何かというと、同質なんです。質が同じなんです。「親・子」は存在的な一如の関係。「主・僕」は使命的な一如の関係です。存在と使命。神の意志に従ってこれ動くというのは使命です。我々は存在的には神・キリストと一つにされ、使命的には神・キリストの御意を行じていく。これは大事なことです。

「クリスチャンは万物に自主なるものにして、何ものにも隷属しない」

「クリスチャンは万物の僕であって、あらゆるものに奉仕する」

この二つの命題をマルティン・ルッターが掲げた。これはコリント書の中から来ている言葉です。神・キリストの僕となると、何ものにも依存しないから、絶対者に依存していることは自由なものだ。この自主なる者は今度は、その自主なるその自由において、勝手なことをやるのではなくて、人を助ける。だから、奉仕する。奉仕する力を持っている。これが本当の意味で「愛する」ということです。「これ従う」というのは信従すること。信従すると、人を愛し助けることになる。だから、

「神を愛することと、隣人を愛することは一つだ」

とキリストが言ったのはそのことなんです。「神さまを愛する」と言ったって、とても愛せませんよ。神さまの愛で圧倒されるから、今度はそこで初めて愛せざるを得ないことになる。こっちから進んで「愛します」なんて、言えやしない。全部、ざるを得ない世界です。必然である。この霊的な必然な世界が本当の自由なんだ。「こうしようか、ああしようか」というのではない。ざるを得ない世界です。だから、自由と必然は天的な意味では一つになる。天的必然が本当の自由である。そういう在り方が、聖霊を戴いているこの義の世界なんです。また、聖霊をいただいている愛の世界なんです。

これも、愛と義がまた一つになってしまっている。全部、これは円還関係だね。線から言うと、義は縦の関係、愛は横の関係です。十字架みたいになる。愛は人を助ける。縦の関係にも、「神を愛せよ」という言葉もあるけれども。これは大事な消息なんだ。聖書は旧約から新約まで、結局この義と愛の連なりで、機織(はたお)りで出来ているようなもんですよ、織物みたいなものだ。だから、

17 神の義はその福音のうちに顕われ、信仰より出でて信仰に入らしむ。録して「義人は信仰に因って生く」とあるが如し。

「神の義はその福音のうちに顕れ」とは、

「神の義はその福音者であるキリストのうちに現れ」

ということです。福音者と言えばいい。

「神の義は福音者のうちに顕れ、キリストを信ずることを、信仰より信仰（信交）に我々をどしどし進ましむ」

ということ。

「義人は信仰によりて生くべし」は、

「義人は信仰に在って生くべし」

の方がいいね。

●パウロは決定的に聖霊に撃たれた

パウロはユダヤ教のときはサウロといった。それがキリストにぶっ倒された。彼はキリストを信ずる者を迫害していたから、復活のキリストに

「なんぞ、我を迫害するかっ！」

とダマスコ途上でひっくり返された。サウロというのは反キリストの最たる人なんだ。自分は、律法は非常に守っている。モーセの律法及び613のいろいろな戒律を一生懸命で守って、大いに自己義認しているわけだ、そこらの異邦人と違うんだと。異邦人は律法を知らないから、これを「罪びと」と称(い)っている。いわゆる罪人ではないけれども。だから、この律法の世界に来ないやつは、みんなけしからんといって――サウロというのは非常に狂信的なんだ――他の宗教を迫害する。ユダヤ教徒はあいかわらずそういう面が非常に強い。

これは困ったもんだ。ユダヤ教から出て、いわゆるユダヤ教にアンチであるキリストは、

「そうではないんだ。モーセの律法のもうひとつ奥の世界をちゃんと自分はつかんでいる」

と。だから、キリストはユダヤ教徒に、祭司からも律法学者からも、新興宗教と思われたわけだ。キリストは十字架に架かるのは、もう必然のことだった。

けれども、あの律法学者の、サウロの先生のガマリエルというのは偉い人だった。サウロはエルサレムでガマリエルのところで一生懸命で教わった。

「お前たちはキリストを信ずる者を迫害しているけれども、もし彼らが本当に神から出ているなら、お前たちは逆にやっつけられるぞ。彼らは滅びないぞ。ヘタするとこっちが滅びるぞ」

と、ガマリエルはハッキリ言った。ガマリエルの言葉をちゃんとサウロは聞いていれば、もう少しおとなしくなったんでしょうけれども。彼は生徒の中の第一人者だった。「いや、あいつらはけしからん」と言って、ダマスコに向かって、男女にかかわらずとっつかまえて牢屋に入れたり、殺すことすらよしとした。一種の殺人犯だ。最初に殺されたのはステパノだものな。

「汝らは聖霊に逆らう」

とステパノはハッキリ言った。あれは素晴らしいですね（使徒行伝７章）。

このサウロがキリストにやっつけられた。霊撃された。ぶっ倒された。アナニヤという人に按手されて、

「わが眼より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と言って、本当に参った。今までキリストを知らない。けれども、復活のキリストが現実に彼に出会って、光と御言でもって彼はひっくり返されたから、これくらい確かなことはない。ガラテヤ書１章で、

「人よりに非ず、人に由るにもあらず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ」（ガラテヤ１・１）

と宣言しているのは、そのことです。直接、キリストにやられた。だから、

「私は誰が何と言っても、しょうがないんだ。もう、キリストの僕なんだ。囚人（めしうど）だ」

と。それで、御霊をいただいた。彼は曠野に行ってずいぶん祈ったですよ、３年間。それから、エルサレムに行って使徒たちに会うまでに13年間かかっている。彼はそれまでに非常に深く集中した。それで、旧約の読み方も違ってしまった。パウロはギリシヤ語訳の旧約聖書を読んでいた。もちろん、ヘブライ語は読めるんですけれども、まだそのときには出来ていなかったらしい。そこの所になかったのでしょう。

パウロは聖霊に撃たれた事が決定的なんです。そして、十字架が自分をかくも贖ってくださったことが後で分かった。パウロは逆なんだ。十字架が土台にはなったけれども、先に聖霊に撃たれた。そして、十字架がハッキリしてきた。また、使徒の中でパウロほど十字架のことを言っているのは他にいない。ヨハネもそれほどではない。全存在が贖われてしまった。過去も現在も未来も、贖われきっているんです、十字架で。

我々も同じことです。相対的に私たちはいろいろな癖があったり、躓いたり転んだりしますよ。けれども、その奥に、そんなことと関わりないところの凄い世界が来ている。

●十字架ですっ飛んでいるところに聖霊はやってくる

だから、私は元気でしょうがない。

「小池先生はなぜあんなに元気なのか。水泳をやるからか」

なんて、そうじゃないよ。もう、小学校の同級生はいなくなってしまったし、中学校が14、15人、これもヨボヨボだから同級会が開けなくなった。高等学校が7、8人、これもダメ。大学はもう少し残っているけれども、ダメだな。結局、同窓会というのはあるけれども、同級会はなくなってしまったよな。無教会でも、もう先輩はみんなダメ。一人、例外がいます、鈴木何とかという人が東北にいる。その方だけだ。もうゲーテさんよりも私の方が歳が上になってしまって、申し訳ないね。ダンテは56歳くらいで仆れた。とにかく、私はおそまきだよ、鈍器晩成という。

パウロは十字架と聖霊を土台にして、彼の書翰は全部展開している。パウロはサウロ時代に律法を一生懸命で遵る律法の行為をただしくやったから、

「自分は律法の義については責むべきところなし」

と誇っているくらいだった。外側から一生懸命で律法を行って、それを義としていたわけだ。そんなものは本当の義ではなかったということに、キリストにやっつけられて分かった。

「いわゆる道徳の世界ではないぞ。超道徳でありながら、道徳を本当に満たす世界だぞ」

ということを言いたいわけなんだ。だから、

「律法の行為なんてものを問題にするな」

と言って、ガラテヤで、大いにキリストを信ずることを徹底的に語っていた。それで彼らは一応喜んだんだけれども、ユダヤ人たちがその異邦人たちにまた言ってきて、

「そうじゃない。パウロはあんなことを言っているけれども、律法をちゃんとしなければだめだ」

とか、また巻き返しをやってきた。その巻き返しのまた巻き返しを主にしたのがパウロのガラテヤ書の書翰なんです。これは多分、第二次伝道のときにエペソで書いた。

「お前たちは、せっかく私がこんなに語ったのに、どうしたことか」

と。その巻き返しをやって、

「律法ではない。信仰だけだ」

と言って、一生懸命やっているのがこのガラテヤ書です。「信仰、信仰」とパウロが言っている。それで義とされる。これがプロテスタントの信仰の、また観念化の意味なんです。パウロも言っているんだ。

「愛に働く信仰だけが益がある」

とガラテヤ書に書いてある。「愛に働く信仰だけが」と、パウロはそういう言い方をしている。けれども、これがまたひょっとすると、躓きになる。そうすると、「信仰と愛」ということ

になる。けれども、この信（ピスティス）が本ものならば、これは愛に働かざるを得ないんです。「愛に働く信仰のみ」というと、

「愛に働かない信仰もあるけれども、愛に働く信仰だけが益がある」

という、信仰が何か二段構えになる。二種類みたいになる。

本当の信仰ならば、それは愛に展開せざるを得ない。人間は、それでもズレがきますから、パウロがそう言うのも無理はないけれども。我々の意識としては、信即愛、信愛一如です。その信は観念でない。内容は聖霊だから。本当にキリストを受けとると、聖霊がくるから。十字架で贖われて、すっ飛んでいるところには、聖霊はやってくる。聖霊が臨んでくるから、聖霊は愛の霊だから、働かざるを得ない。愛に展開せざるを得ない。人を助けざるを得ない。そういう信即愛の世界では、キリストの愛が働かざるを得ない。（逢沢一郎議員の母上を見舞った話省略）

永井龍太郎という人の『グラッドストーン』の伝記を私は水戸の高等学校に入ったその日に買って読んだから、不思議なことがあったものだなと思った。兄貴からグラッドストーンのことを聞いていましたから。ビスマルクとグラッドストーンとリンカーン、これが19世紀の本当の政治家だ。彼らは全部、聖書を身読（しんどく）した連中です。やはり、政治であろうが、経済であろうが、何であろうが、聖書が本当の土台になっていなければ、本ものに成れない。これはハッキリそうです。ゲーテも本当に聖書をからだで読んでいた。ダンテももちろん。

聖書は教えの本ではない。その中に入れば、生命の本だ、光の本だ、愛の本だ。行き詰まりを知らん。いろいろな事にでっくわせば、逆に聖霊の力が働く。ハッキリそうです。絶対に行き詰まらない。人生にはいろいろな事がありますが、いろいろな事にでっくわせば、それは本当にキリストの霊が働き、キリストのものとなる。全部、その恵みなんです。いわゆるプラスも、いわゆるマイナスも、本当の意味で全部そうです。だから、福音の世界というのはありがたくてしょうがない。皆さん、どうですか？　そうでしょ。

●キリストの信義愛に生きる

第十巻『聖書は大ドラマである』の「11月17日　神の義の顕現」の項を読みます。

「神の義はその福音のうちに顕はれ、信仰より出でて信仰に入らしむ。録して「義人は信仰に因って生く」とあるが如し。」（ロマ１・17）

「神の義はその福音のうちに顕はれ」という一句は、旧約時代のサウロには思いもよらぬ真理であった。神の義は律法を実践する者に於いて顕れると思っていて、その律法の義を誇っていたサウロであった。生活の祈りに於いて神意を承り、これに従うところに神の義があることを知らなかった。ところがキリストはモーセの律法を越えた神意に全存在を以て信従し、体現したのであった。神意体現に神の義が成就するのである。そのようなことはイエスの外誰もなし能はぬことである。我々が罪びとである

というのは、我意、我執のために神意に信従できない。神の義はその実践者、即ち義人イエスに於いて顕れた。この義を与えるキリストが福音体である。キリストの十字架の贖罪を体受すると、キリストは我々の罪を贖いとって、罪なき無の根源現実を賜う。そしてキリストの義を賜わる。では義の実質は何か。聖霊である。イエスは神に全身を投入したから神と一如となった。すると神意は神の霊と共に受けとれた。神意を体現し得た力は聖霊であった。であるから十字架のキリストを信受体受すると聖霊が降臨してキリストの義が力ある内容として受けとれる。信仰は実は信入である。全存在的信行信入、そしてキリストと一如の信交である。これが信仰より出でて信仰に入る、である。パウロはハバクク書2・4の聖句を福音的に引用した。実はこのような「信仰に生きる者が義人である」というのである。」

「義人は信仰に生きる」というのは、義人の方がむしろ――ドイツ語でも先に述語を言うことはいくらでもあるからね――

「信仰に生きる者が義人である」

ということ。ハバクク書のこの言葉は、ギリシヤ語訳をみると、

「わが信に生くる者は義とされる」

というような言い方をしている。特に「わが信」と書いてある。ということは、

「神さまの信に生きなさい。そうしたらば、義とされるぞ」

ということ。キリストの信に生きなさい。そうしたら、義とされる、義をたまわる。

何しろ、いかなる事態も、私たちにとってはキリストが主体なんです。キリストがサブジェクト（主体）です。こっちはオブジェクト（客体）です。そして、サブジェクトとオブジェクトが一つになってしまう。キリストが主体であります。

窓を開ければ太陽が光るのではない。太陽が光っているから、こっちが窓を開ける。こんな蛍光灯なんか本当は要らないんだ。窓を閉じて蛍光灯でもって本を読んでいる。しょうがないもんだ、人間というのは。せっかく光っているんだから、窓を開けなさいよ、光をいれなさいよ、そうしたら、人間の造っているロウソクでも電灯でもガス灯でも蛍光灯でもないぞと。相対的な世界の太陽の光というのは絶対の光だから。キリストが光体なんだ。これを受けとると、もう影がなくなる。

「心に太陽をもて」

という。日本人は太陽を国旗としているのに、なんだっていうんだ、国旗を本当に尊重しないで。国旗を尊重すると、軍国主義だと思う。冗談じゃない。そういう今までの妙な先入観的なものは全部突き破って進んでいかなければだめです。何と思われたっていいから。自分自身が国旗とならなければしょうがないじゃないですか。これはキリストだから。光体だから、霊的太陽だから。私はバカだから、それを直ぐ受けとるんです。だから、楽になってしまう。皆さんは、あまり判断し考え過ぎる。

「我思うゆえに我あり」
なんて、デカルトの真似をしない方がいい。
キリストの信に生きる。キリストの義に生きる。キリストの愛に生きる。なんでもない。非常に簡単なんだ。

●隠れた福音

第十巻の「11月18日　恵信の義」の所を読みます。

「然るに今や律法の外に神の義は顕はれたり。
「律法の外に」とあるが、律法の義は本ものの義ではない。「律法の他にこそ神の義が顕れた」ということ。マルティン・ルッターがこのローマ書の二つの箇所を本当につかまえたから、彼の宗教改革が始まったんですよ。そのことはイザヤ書と詩篇32篇の中にあった。

これ律法と預言者とに由りて證(あかし)せられ、イエス・キリストを信受するに由りて信ずる者の中に臨みたる神の義なり。
「律法と預言者とに由りて證せられ」とあるけれども、預言者は証したよ、けれども、律法の方はどうだかね。その証の、ちょっと程度が違う。預言者はある意味において、律法を乗り越えていますからね。特にイザヤとエレミヤはそうです。「新しき律法をお前たちの心の中に置く」と、エレミヤ記31章に出ている。

これには何らの差別なし。凡ての人罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、無償にて神の恩恵(カリス)により、キリスト・イエスに在る贖罪により て義とせらるるなり。」(ロマ3・21〜24)
ガラテヤ書には、さらに「義とされるのをまつ」という言い方がある。あの「義とされるのをまつ」ということは、

「本当に現実に義人となることは地上ではないから、やがて天界においてその時がくるのをまつ」

という内容なんです。こっちでは三日月だけれども、天界にいけばそのうちに満月になるぞというわけです。

パウロは三章前半で、ユダヤ人もギリシャ人もみな罪の下にあると断じ、神の前に義人なし、一人だになしと告白している（3・9、10）。律法を厳守したと自任していたパウロ自身、実は律法の根本精神を満たしていなかったことを悟ったからである。律法は律法を越えた立場に立たなければ本当に満たすことができない。これを成就したのがイエスであった。実は律法は隠れた福音であった。
この「隠れた福音」ということは、おそらく私が初めて言った言葉です。他の人が言っているかどうかは知らんけれども。モーゼの十誡は、「汝殺すなかれ」ではない。
「汝は殺人はしない。私がお前の神だからお前は殺人なんかしないぞ」

という信頼している言なんです。

「汝、殺人せず。姦淫せず。盗まず。偽りの証をたてず」

という、全部、信頼している言葉なんです。先生は生徒に「お前はよく勉強せよ」なんて言うのではない。

「お前はよく勉強するね。だから、私は試験はしないよ」

と言う。どこかにそういう学校があるかね。「お前たちはよく勉強する。だから試験はしない」と。それで生徒たちがみな優秀である、という学校が日本のどこかにあったら見たいもんだな。もし、あなた方の中で誰か私立学校を立てるならば、そういう校長さんになってください。私は時々、校長の時に壇上からそういうようなことを言った。けれども、試験しないわけにいかなかったからしてるけれども。東京大学では一遍、

「君たちはカンニングはしない。だから、私は今日は監督しない」

と言って私は教室を出ていった。ちゃんと皆やってくれた。それは18人位のドイツ語で入ってきたクラスだったな。今はドイツ語は、日本ではずいぶん軽視されている。ダメだよ、ドイツ文化というのは素晴らしいものを持っているのに、ただ実用的なものばっかりで動いていたのでは。ドイツ文学にいく者がほとんどいなくなってしまった。

「汝殺すなかれ」ではなく「汝は殺さない」という神の信頼の言であったからである。これを満たすには神と一如になるを要する。人間にこれができない、「罪を犯す」我執者(エゴイスト)であるからである。「律法と預言者」即ち旧約聖書はキリストを指している、知らずして。福音が隠されている。神の義、聖意体現者たるキリストを信受、体受する者の中に神の義、キリストの義が与えられる。

ちゃんと書いてあるね、その通りです。

信仰は観念的であってはいつまで経っても生命も力も来ない。この義は力、生命、光、天道、生きた自由の律法であるから信行一如の質をもっている。だから、キリストという恩恵体そのものを全存在で受けることが本当の信仰で、ハッキリ信交と書くべきだ。このような受けとりには必ず聖霊が同時に臨む。「義とされる」も「義を与えられる」意である。」

「意である」といったって、これは私が言っているんで、「与えられる」という言い方はどこにもしてない。パウロの真意を私は表現しているわけです。もちろん、パウロが観念であると言っているわけではない。大変なひとですよ。「信仰のみ」と言って、パウロが最もはげしい行為をしたんだから。これは本ものだ。あれだけの大伝道をしていれば、大体ぶっ倒れる。非常に迫害されているからね。まぁ、大変なもんですよ。

いいですね、大体そういうわけで、非常に根本的な大事なことを、今日は皆さんと学んだ、受けとったわけです。おしまい。